

### 13. 都道府県単位の平均寿命別にみた国民健康・栄養調査結果における栄養摂取状況の推移

研究協力者 北岡かおり（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター予防医学部門 特任助教）  
研究分担者 門田 文（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 准教授）  
研究協力者 岡見 雪子（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター予防医学部門 准教授）  
研究協力者 近藤 慶子（滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター予防医学部門 助教）  
研究協力者 中村美詠子（浜松医科大学医学部健康社会医学講座 准教授）  
研究分担者 尾島 俊之（浜松医科大学医学部健康社会医学講座 教授）  
研究分担者 岡村 智教（慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室 教授）  
研究分担者 由田 克士（大阪市立大学大学院生活科学研究科 教授）  
研究分担者 西 信雄（医薬基盤・健康・栄養研究所国際栄養情報センター センター長）  
研究代表者 三浦 克之（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 教授）

#### 【目的】

国民の生活習慣やリスク要因は時代とともに変化しており、地域や世代間の格差が生じると考えられる。本研究は、日本国民を代表する集団である国民健康・栄養調査（国民栄養調査）のデータ推移分析により、都道府県単位の平均寿命別に栄養摂取状況の差を明らかにし、生活習慣病予防のための最新の優先的課題を明らかにすることを目的とした。

#### 【方法】

1995-2016年のうち14年分（1期：1995-97年、2期：1999-2001年、3期；2003-5年、4期2007-9年、5期2012年、6期2016年）の国民健康・栄養調査（国民栄養調査）の40-69歳を分析対象とした。2000年の平均寿命別に都道府県を4群（平均寿命が高い方から男性：M1-M4、女性：F1-F4）に分類し、身体計測値、栄養摂取状況（食品群分類が共通である2001年以降）の推移を検討した。2010年の10歳階級別人口に基づき年齢調整した。

#### 【結果】

BMI (kg/m<sup>2</sup>) は1期から6期まで男性は増加、女性は低下傾向、男性6期はM1: 23.9、M4: 24.5、差が0.6であったのに対し、女性6期は差がなかった。エネルギー (kcal/日)、炭水化物 (g/日)、食塩相当量 (g/日) は2期から6期まで男女ともに低下傾向にあり、平均寿命による比較では、明らかな差を認めなかった。女性は平均寿命の長い群は、他の群と比較して、総脂質 (g/日)、動物性脂質 (g/日)、飽和脂肪酸 (g/日) がやや低い値で推移する傾向を認めた。また、女性は平均寿命の長い群は、他の群と比較して、たんぱく質・脂質エネルギー比率がやや低い値で推移し、炭水化物エネルギーは高い値で推移する傾向を認めた。食品群別の比較では、女性は平均寿命の長

い群は、他の群と比較して野菜類（g/日）が高値で推移していたが、果物は2期から6期まで男女ともに低下傾向にあり、平均寿命による比較では、明らかな差を認めなかった。

#### 【考察】

日本国民を代表する標本による国民健康・栄養調査の20年間のデータ推移分析により、都道府県単位の平均寿命別に身体計測値、栄養摂取状況の差を明らかにした。今回の分析では統計学的検定を行っていないため、結果は主に推移について記述するに留めた。

#### 【結論】

平均寿命に影響を与えるBMI、栄養摂取状況は、性別により異なる可能性が示唆された。今後、平均寿命だけでなく、疾患別の死亡率との関連などを検討する必要がある。

**第57回日本循環器病予防学会学術集会（2021.5.28～6.15 WEB開催）**